

学生の自主性を引きだすことをめざす体育授業の意義と課題

池 田 隆 二*

The Significance and Some Problems of Physical Education to Promote the Self-Reliance of Students

Ryuji IKEDA*

(Received September 17, 1976)

1 まえがき

授業後の学生の感想文に、「日頃、あまりスポーツなどの運動をしないため、一週一回の体育の授業がくると妙に体育館へ足が急いだ。授業が終わった後は汗びっしょりになり、さっぱりとした感じがのこる。チームごとに自主的にやったため、チーム内で友人としての強い結びつきができた」。「自分はもともと運動神経がにくて、運動することがきらいであったが、この授業でからだを動かすことが容易にできるようになった。これからはスポーツ活動などに親しむことができるという自信は、何よりの収穫であった」というようなものがあつた。

このような感想文を読む時、「授業はおそろかにできない」という心情にかきたてられる。そんな教師の心が授業への熱意の支えとなり、よい授業をめざして授業研究にとりくむことになる。

よい授業を構築していくためには、教師は学習者とともに教材を追求し、授業に出現する多彩な諸事象の中から学生を変革させ、教師自らも変革する授業の創造をめざすものでなければならない。それ故に、授業とは教師にとって、根気ときびしさが要求される実践の場であるといえる。

これまでの体育授業研究の報告では、質問紙法、作文、あるいは授業記録を分析するという方法が主として用いられ、授業の学習過程は発見的学習過程が多く、授業形態は小集団学習が多い。そして対象となる学習者のほとんどが小・中・高校生である。

それらの報告者の中で、体育実践を通して、体育のよい授業の姿を解明した高田典衛氏¹⁾は、体育のよい授業の姿を、主に児童・生徒からの意見収集に求め、子供の

求めるよい授業とは、①精一杯運動させてくれる授業（快適な運動）、②ワザや力を伸ばしてくれる授業（技能の伸長）、③友人と仲よくさせてくれる授業（明るい交友）、④新しい発見をさせてくれる授業（新しい発見）の四つの条件が満たされた授業であると報告している。

小林篤氏²⁾は、よい授業の姿を学生・生徒の態度構造から解明し、学習者の体育に対する態度は、「体育授業の場でのよろこびの感情」「授業内容に対する評価」「体育授業に対する価値観」という三つの要素によって構成され、これらの三つは相互に関連し合っているが、これを構造的にとらえれば、「よろこび」から「評価」が生まれ、そして「価値観」が育つ。つまり、「楽しかった」という感情が「よい授業だった」という思いを生み、「体育の授業は大事だ」という価値観をみいだすことにあると報告している。

私は、現に自分で行っている授業の分析を通して、現場からよい授業の法則を発見し、大学体育授業の理想像へのアプローチを試みている。

小林氏の作成した態度調査票を私の授業に適用し、学習者の態度変容から、小林氏のよい授業の姿の筋道を検証した結果は前稿³⁾で報告した。

本稿は、私の考えに基づいて行った授業に対して、学生がどのような反応を示し、授業のどこに問題があるのかなどを、授業後に書いた学習者の自由記述を基に明らかにするものである。

2 どんな考えに基づいて、どんな授業をしたか

大学体育の授業研究に関する報告は数少ない。その中にあって、四宮馨氏⁴⁾のS・P (Self Planning) 方式の授業が注目される。

S・P方式による授業は、学生がグループで授業の計画から展開までを実践し、教師が助言・指導するという

*保健体育系列 (Department of Liberal Arts and Sciences
—Health and Physical Education)

授業方式である。

私はこの方式による授業が、大学における体育学習で望まれる授業形態の一つであると考えている。その理由は三つある。

第一は、学生が過去の学校体育などを通して修得した運動実践の方法や技能などを応用するためには、教師が授業全般を指導する学習指導の過程を通してよりも、学生の自主性を重視した授業形態の方がよい。

第二は、自主性を重視した授業の過程で問題が起った場合、問題解決に際しては、学生のこれまでの運動経験を基に思考させることによって、自ら新しい技能や行動力を獲得するための態度が身につく。

第三は、自主的な運動実践という具体的事実から、不可能を可能にするのは努力することにあるなどの体験を通して、運動する意欲や運動するよろこび、さらには創造的な能力の開発につながる。と考えるからである。自主性を重視したグループ学習は、学生の主体性を重視することによって、学習者のもっている無限の可能性を引きだし、自らの手で能力を開発し、自ら学ぶところにその本質があることは云うまでもない。だからといって、授業は学生の自主性にゆだねるということで、教師は授業で出席だけとって傍観していればよいということではない。

斎藤喜博氏⁵⁾は、「教師ほど自己とのきびしいたたかいを必要とする職業はない。そのことは授業が科学や芸術と同じように、追求を重ねていかなければならないものであり、教師と子供がひとつになって、きびしく真理を追求していくという態度と方法をとらない限り、子供をよくすることができないからである。」「すぐれた授業は、教師がいつでも教材の中から、また、子供の中から問題を明晰にとりあげ、それをはっきりと子供につかませ、拡大深化させ、それをまたみごとに展開させ発展させている」と述べている。

斎藤氏の指摘は、授業とは、教師と学習者がイカダに乗って、両者が足をぬらしながら河を下り、目的地に向かって前進していく状態と同じであって、教師と学習者が共に変革をめざす授業でなければ、よい授業は生まれてこないということにあると思う。

私が、学生の自主性を重視する授業というのは、この意味にはかならないのである。

このような考えに基づいて行った授業の実際について、本稿の素材となった授業の概要を示すと次のとおりである。

対象は大学2年生(357人)。教材はバスケットボール(昭和49年度。コート2面。4チーム編成。1チーム15

人)、バドミントン(昭和50年度。コート6面。6チーム編成。1チーム11人)、バレーボール(昭和50年度。コート4面。10チーム編成。1チーム8人)、ハンドボール(昭和50年度。コート2面。7チーム編成。1チーム9人)。授業時間90分。授業回数12回である。

授業はいずれの教材も、はじめの時間に教師が学習目標、グルーピング、役割分担などの導入を行い、引きつづき、学生の計画に基づいて授業展開をする、一般的なグループ学習で行った。

この授業に対する調査の方法は、授業で感じた事柄を自由に記述させることと、あらかじめ用意した質問事項に記述させる二つの方法である。

私がこれまでにに行ったグループ学習による授業後の調査では、どの教材をとりあげてみても、体育の授業は意義があったと答えた学生の比率は約80%であった。しかし、学生が認知する体育学習の意義については、概念的にとらえることにとどまっていた。

3 その授業に対して、学生はどんな好意的反応を示したか

学生にとって、体育学習の意義とは何であるのか、このことについては、概念的な思考ではなく、学習者の卒直な意見から明らかにする必要がある。

そこで、この授業で学生が感じた事柄について、自由記述で提出された作文の中から、学生が認知した体育の意義についてクローズアップしてみることにした。

作文から得る学生のこの授業に対する感想は、多種多様である。それらの感想を分析する手法として、この授業で学生が示した好意的反応の多数意見を一括して処理し、一般的によみとることによって、学生の真意をとらえることにした。それらの「生の声」を、原文のままにいくつか列記してみる。

〔事例1〕 大学に入って、体力測定の結果、高校1・2年の頃と比べ、かなり体力が落ちていることがわかった。

〔事例2〕 私の場合、大変虚弱体質なので、小学校から現在まで、体育の時間は好きでなかったが、大学の体育を通して、これからは自分なりに体力の向上を計るよう努力しなければならないという自覚と、運動することの重要性を知ることができた。

〔事例3〕 スポーツをやった後、汗をかいた状態のなんともいえないすがすがしき、そして何もかも忘れてスポーツに打ちこむ時のすばらしさを感じた。

〔事例4〕 体育の時間は大変楽しかった。汗びっしょりになって、からだ中くたくたになった後の満足感、あれこそスポーツするよろこびだと思う。ぼくたちはス

ポーツをやりたいと思っているが、なかなかその機会がない。そんな中において体育実技は貴重だと思う。

〔事例5〕 バドミントンでスマッシュを打つ際、上から腕を振りおろしシャトルにあたった瞬間、手首のスナップを使って前へ押し出すようにすると、かなりするどい角度のスマッシュが打てるということがわかった。

〔事例6〕 バスケットボールでジャンプシュートをする場合、一度フェイントをかけてからシュートすると効果がある。

〔事例7〕 とにかく授業は楽しかった。チームのみんなとも仲良くなれたし、相手チームの者とも仲よくなりました。今まで一度も話したことのない人まで体育の時間を通じて、話し合うことができるようになりました。

〔事例8〕 スポーツを通じて多くの友人ができた。同じチームに限らず他のチームのメンバーとも親しくすることができた。試合後の握手によって、今まで敵であった者が急に連帯感をもった友達みたいにかわる。

〔事例9〕 精一杯やっている、みんながよってきて、“よくやったな”といってくれ、ほんとうにうれしかった。体育の時間は、他の講義では味わうことのできない創造力、積極性、団結などを養うことができる。

〔事例10〕 リーダーとなった時、大切なことは常に余裕をもち、冷静に、しかも思いきった行動をとらねばならないということ。そして、責任をはたすことの重要性を痛感した。

以上、この授業を受けた学生の感想文の実例であるが、学生の記述したさまざまな感想文は、ここに列記したいづれかの内容に類似していた。

ここにあげた感想文を内容別に分けると、事例1・2に共通性がみられ、事例3・4、事例5・6、事例7・8、事例9・10にそれぞれ共通性がみられる。その共通性を集約してみると、次のようにまとめることができる。

(1) 体育の授業によって、からだを動かすことの重要性を再認識することができる。

(2) 体育の授業によって、すがすがしい体感と気分を味わうことができる。

(3) 体育の授業によって、運動の技能など、新しい行動力を身につけることができる。

(4) 体育の授業によって、友情の尊さを味わうことができる。

(5) 体育の授業によって、フェアの心を養うことができる。

この五つの側面が、この授業方式で学生が認知した体

育の意義となろう。

したがって、自主性を引きだすことをめざした体育の授業は、少くともこの五つの側面が満たされた時に、よい授業の姿となりうるものと思われる。

体育学習の理想目標の定説的なものとして、1)心身の健全な発育と増強、2)運動技能の向上、3)社会的態度の育成という三つの目標がある。

この三つの目標を、学生がこの授業を通して体得していることを、多くの学生の意見から収集することができた。

4 学生の反応にみる、この授業のメリット

この授業方式による学習の後、学生があらのままに書いた自由記述からよみとる限り、学生は体育授業で行うスポーツ活動を、単なる身体運動にすぎないとうけとめているのではなく、身体面からさらに精神面への効果について記述したものが多くみられた。

それらの記述によると、授業では一部の運動部活動などを行っている者を除いて、まず、自己の体力の低下を自覚する。しかし、体力の自覚という身体面だけにとどまらず、授業は学習者にとって、人間を理解し、悩みを解消し、エネルギーを発散し、友を得、そして正義感、自制、寛容などの心を養う最も手近かな体験の場であると述べている。

このような記述でみるように、学生などにスポーツの生活化を促す場合、体力づくりのためにと力説するよりも、むしろ、スポーツは人間の心理的・社会的要求の側面から不可欠なものであると説くことが、的を得た指導であるといえよう。

このように、体育の授業では人の心理的・社会的側面を通して、ものの見方、感じ方、考え方などが形成されるといってよい。そのような意味で、自主性を重視した体育学習によって、養われるものは身体的なものよりも、むしろ、精神的なものが主であるといってもいいすきではないであろう。

5 その授業に対して、学生はどんな非好意的反応を示したか

この授業の結果、多種多様な学生の好意的反応をみることができた。

よい授業をめざすためには、この方式で行った授業の非好意的反応から、授業の何が問題であったのかを明らかにし、それらの問題点を改善する努力が求められる。

そこで、実際の授業の姿を否定した学生の意見をもとに、この授業の問題点を明らかにすることにした。

その方法は、先にあげた高田氏のよい授業を成立させる四つの条件 ①快適な運動、②技能の伸長、③明るい

交友、④新しい発見)を加味して、質問事項を作成し、授業の概要で示した357人の学生を対象に調査した。

その質問内容は、「せいいっぱい運動することができたか」、「技能修得の程度はどうであったか」、「チームの者が話し合い、力を合わせることができたか」、「アッ、ワカッタ、アアソウカというような新しい発見があったか」の四問である。

その結果、この質問に非好意的反応を示した比率は、それぞれ24%、21%、24%、50%であった。

次に、これらの非好意的反応でみた多数意見を記述することによって、授業の何が問題であるかを考察する。

(A) せいいっぱい運動することができなかった理由

体育の授業で、せいいっぱい運動することができなかったという、体育実践の中心にもかかわる問題の最大の理由は、多人数によるコートの不足があげられている。そのために、試合の時に出場時間に制限が加わったり、練習する時間が少なかったりなど、からだを動かすはずの体育の時間に、思うようにからだを動かすことができなかったということである。

大学体育の現状は、多人数によって生じる施設の不足など、物理的条件が満たされない場合が多い。それらの条件のもとで、多くの教師は指導の方法を、実践を通して探求はしているが、その具体的方法についてはまだ詳らかでない。

数少ない体育施設で、数多い学生をどう指導すべきかについては、教師の指導方法上の問題として、研究されなければならないことは無論であるが、この問題が容易に解決されない理由として、教師の力量だけでは手のとどかない問題でもあるからである。

この問題の解決にせまるには、体育学習における施設の規模に対して、どの種目はどのくらいの受け入れ人数であれば、教師の意図する授業展開ができるかなど、学習者の受け入れ条件を確立し、それを実践的に具現化していかなければならない。それと同時に、せいいっぱい運動する条件づくりで問題になるのは、屋外で行う実技種目の雨天時の運動処方のある方である。

以上の二点について、解決していかない限り、学習者がせいいっぱい運動することができたという実感を得る体育授業の望ましいあり方とはなり得ない。

(B) 技能修得ができなかった理由

技能修得ができなかった理由のほとんどは、練習時間の不足である。このことは、施設や受け入れ人数と深いかわりあいをもっている。そこで、技能修得が練習時間の不足によってできなかったという意見内容をみると、次の二つに大別されていることがわかった。

一つは、技能水準の低い学生が、普通の水準までの技能を修得する時間がなかったということ。二つには、運動部経験者など技能のすぐれている者が、自分の技能の向上をみるだけの授業水準に達するには、時間が足りなかったということである。

授業でみる、学生間の運動技能や体力などには、かなりの個人差があることを無視することはできない。

体育の授業は、個人個人の技能などの程度を無視して、全学生の身体機能が万遍なく発揮されるように仕向けられるのが本来の姿である。しかし、一方ではそれが授業の効果をそこねる結果をまねくこともありうる。

授業で、技能の低い学生に目をむけると、バドミントンの授業では、ラケットにバードがあたらない学生が居り、その学生の試合相手は、“彼と試合をしても、バドミントンにはならない”といって、敬遠する場面がみられ、バスケットボールの授業では、パスとキャッチがよくできない学生は、試合がせってくると必ずベンチに腰をかけている場面がみられた。

このように、技能水準の高い学生と低い学生が同居する授業の方法には、技能別の指導もひとつの方法ではあるが、授業で大切なことは、教師がまず技能水準の低い学生に目をむけ、彼らが体育学習を通して、何を感じ、何を知り、何を考え、そして何を行おうとしているのかなどの事実を把握し、指導の手がかりを得ることから出発しなければならない。

一方、技能水準の高い学生が、満足できるような授業の改善策のひとつとして、それらの学生をティーチングアシスタントとして、授業で学習者の技術指導やチームづくりのリーダーとして位置づけることによって、かなりの成果が期待できる。

つまり、彼らのこれまでに修得した技能やチームづくりの経験を応用させ、技術の未熟な者を援助することによって、授業は単に自分の技能などを向上させてくれる内容ではないという指摘を解消するひとつの方法ともなり得る。そのためには、グループでリーダーを選出する時は、リーダーのタレントとなり得る者を選ぶよう助言することが望ましい。

過去に、すぐれた技能を身につけた学生を私が選び、チームのリーダーとして位置づけた授業を行い、学習効果を高めたことがある。それらのリーダーは、技能はすぐれているが、技能を修得する方法について、要領よく解説した者はまれであった。そのような解説の仕方を助言してやるのが教師の役割でもある。

この方式の授業は、彼らが過去に行った体育学習の内容と異り、彼らに体育授業への意欲を喚起させることに

もなった。

(c) チームの人と話し合い、力を合わせることができなかった理由

チームの人と話し合い、力を合わせることができなかった者は、技能水準の低い学生である。その多くの理由は、技能に関する話し合いの時は消極的になり、技術が未熟なために、チームの者と力を合わせるまでにはいかなかったということである。

このように、技能水準の低い学生を、チームにとけこませるための指導のあり方が問題として残る。

(d) 新しい発見

新しい発見をした者としなかった者の比率は、それぞれ50%であった。新しい発見をしなかった者からの意見の収集はしなかった。

新しい発見をした者の大多数は、体育実践の過程で、新しい行動力となり得た技能的な事柄、例えば、ハンドボールでシュートをするときのタイミングがわかった、バドミントンでハイクリーヤーの技術をマスターすることが何よりも大切であることを授業を通して知った、などであり、つづいてルールや試合の方法、試合の戦法、そしてチームワークの重要性などである。

以上、この授業方式による学生の非好意的反応について考察してきた。これを次のようにまとめることができる。

この授業に対して、非好意的反応を生みだす要因として、

- (1) 多人数によって生じる施設、授業時数の不足に起因するもの。
- (2) 学習者の技能水準のアンバランスに起因するもの。

上記、二点を学生の記述から、この授業に対する非好意的反応として明らかにすることができた。

6 学生の反応にみる、この授業方式の改良点

この授業方式による学生の好意的反応と非好意的反応について考察してきた。

次に、学生が考えるこの授業方式の改良点について記述されたものの中から二、三とりあげ参考に供したい。

〔事例1〕 自分が行うスポーツ種目について、先生が指定した書物を、授業の始めに学生同志が徹底的に読む。そして、そのスポーツの理解と基本的な練習の方法を理解し、実技の時間に学生が自主的に練習を行う。先生は学生の質問などに対して、アドバイスと技術面の指導をする。

〔事例2〕 中学・高校でやったことのないスポーツ種目を、大学で紹介し、その方法を指導してもらいた

い。

〔事例3〕 七名ぐらいで一つのグループを作り、実技プランや小論文のテーマなどをグループで考え、授業のはじめに先生に提出する。体育の時間は、その計画のもとづいて学生が自主的に実技を行う。ひとつのグループの中には、技術の高度な者から低度の者を一緒にし、互に協力し合って、グループの技術水準を高めるように努力する。時々、グループ内で反省会や討論会を開き、仲間の意見を聞き、それらを参考にして改良し、技術や精神面の向上をはかる。

〔事例4〕 大学の体育は、自己の身体の機能を知り、それを自ら研究することにある。

実技の実施に際しては、すべての学生を同一にとりあつかうのはナンセンスである。そのためには、まず、体力テストを行い、個人個人がその時点での体力を知り、体力をつけるためにはどうすべきかを、体力に応じてレポートし、先生に提出する。そして、レポートにそって自主的に実施し、ある期間が経過したら体力が向上したかをテストする。もし、体力の向上が少ない者は、もう一度体力を増強させるためには、どうすればよいかについてのレポートを提出させ実施させる。

これと同時に、好きなスポーツ種目を選ばせ、テストや記録をとる。その後、各種目ごとの技術到達目標などを、先生が示し、個人やチームごとに自主的に練習させ、先生はそれを観察し適切な助言をあたえる。そして、授業の終わりに、技術などがどの程度目標に到達したかをテストする。最後の時間に全員で自己の体力を高めるためには、自分はどうかというテーマでディスカッションを行う、などである。

ここに例示した授業の方法は、学生の自主性を引きだすことをめざす体育授業について、学生の立場から率直に述べたものである。ややもすると、画一的におちいっていると思われる体育授業のあり方を、大学生が学ぶにふさわしい体育授業のあり方として、具体的に提示したものであるといえる。

例示した学生の意見でみるように、多くの学生は、大学の体育授業のあり方について、自分の理想とする授業の姿をいだいているという知見を得ることができた。

それらの知見から、この授業を一步進めて、よい授業へと改良するためには、授業で教材となるスポーツ種目に関する文献や書物などで討論する時間を設け、自分が行うスポーツ種目の知識や技能修得の方法について、認識を深めさせ、それを自らの問題として考えさせ、さらに、それらを土台として、自主的・創造的な学習態度で実践させることである。

つまり、学生の自主性を引きだすことをめざす授業方式のひとつには、演習と実技が有機的に関連し合って展開する授業方式が望ましいということである。

7 むすび

大学の体育授業で問題となるのは、スポーツ教材をとりあつかう場合、高度化されたスポーツのルールと競技場をそのまま採用するか、もしくは、それに準じた方法で実践されなければ、授業のあり方として学習者が満足しないことにある。そのためには、実施種目の受け入れ学生数に応じた施設と設備が保障されない限り、学習効果を高める条件とはなり得ない。

次に、学習者の問題である。初等・中等教育水準で習得してきていると思われる知識や技術に、個人差がありすぎるということ。特に、実技面で見ると限りでは、体力のある者となない者とは格段の差がみられ、スポーツ技能のすぐれている者とそうでない者に極端な差がみられることにある。

体育の授業は、体力的にも技術的にも高低の差こそあれ、全学生の身体の機能が万遍なく発揮される授業のしくみでなければならないし、さらに、学習者が集団活動を通して、人間を理解し、社会生活を営む能力などを養うことをめざす授業でなければならないことというまでもない。

そのような授業をめざす体育実践の方法には、定まった一定の方法はない。

私は、大学体育授業で望ましいと考える方法のひとつとして、学生の自主性を引きだすことを志向する授業を行っている。その授業方式は、多くの学生によって支持されていることを、学生の意見で知ることができた。そして、現行の授業方式について、いくつかの改良点をみいだすことができた。その改良点を来学期の授業で採用し、大学体育授業の理想像に向かって実践していくことが、今後の課題である。

文 献

- 1) 高田典衛：「体育授業入門」p26～28, 1976, 大修書店
- 2) 小林篤：「体育の授業」p28, 1975, 一荃書房
- 3) 池田隆二：「体育実技の授業診断」p87～95, 1974, 中部工業大学紀要第10巻B
- 4) 四宮啓：「SP方式による体育学習指導の理論と実際」1975, ベースボールマガジン社
- 5) 斎藤喜博：「斎藤喜博全集4」p188～189・p352, 1976, 国土社

謝 辞

本稿の素材となった、バレーボール、ハンドボールの授業の実際については、名城大学保健体育亀山紘美講師 山口清助手の授業でご協力を得た。誌上を借りて謝意を表します。